

雜 錄

檜 垣 姫

(前號のつぎ)

朽木庵主人

奥 の 國

是より此集を見るにつけて聊思ふふしくを述ふへし上文に擧げたる奥の國と云に付て中嶋廣足の説に大隅薩摩のあたりは九國のはてにて道の奥之これ東なる道の奥の國に同じ國の前後を道の口道の後といへるも同じ心之上ると云へるは太宰府の方を上として云る之國の前後を分けられしも九國は太宰府の方よりの遠近によれり或説に豊筑肥の國の前後は外海を前にし内海を後にすと云るは甚じき僻言之といへり薩摩あたりを奥の國と云へりしは物に餘り見えす然れども道の口と云に向へて道の奥々の國子と言はんも理なればかゝる習はしもありげむ抑その九國の前後は皆太宰府の方よりの遠近之と言はれたるは太宰府を本とすとの謂に見ゆ是は如何にや六十六國は文武天皇の御時に定まりしとの説は誤なれども大方その比に分けられたる者にて同天皇の後に分れまは數ヶ國にて嵯峨天皇弘仁中に越前を分きて加賀國を置き初て六十六ヶ國とはなりし之今太宰府は職原抄にも聖武天皇天平十五年始て筑紫に鎮西府をねかる是より先きに太宰府の號ありと見え更に國史をみれば推古紀に十七年夏四月筑紫太宰府奏上とみえ天智紀に十年十一月對馬國司使を筑紫太宰府に遣して言すともみえ持統紀に三年閏八月淨廣肆河内己をもて筑紫太宰帥とすとも見えていとく舊きやふなれどもその始てれかれし年は定かならずも太宰府をおかれざる前に係れる九國のありとすればいか

てかこれによりて前後をわけられしとはいはむにもかくにも我邦の習はしにては何事もすめらることの宮居まします所を本としてさてその遠近によりて定むるならばしの多かれは太宰府を主としてとは決め難くやあらん歟後者の爲めに聊おどろかしれく

國守神拜

上文に引ける國守神拜に出てらるゝ道にさまわひたれば云々といふにつきて補註に玉勝間にさらしなの日記を引きて東より人來たり神拜といふ事して國のうちありきしに云云これ菅原者標の東國の國司になりて下りしか許より言ひたせたることなり昔は國司任國に下りては先づ部内の神社々々に詣でしことなりとあるこれなり國司神拜の事は猶異書にも見ゆといはれたりげにもこの説のことで菅原道真公の加賀國權守となりて下られし時もまづその國の一の宮に神拜せられしこと文に見ゆその時に作られし詩は菅家文章に見えたりよむもの先こゝに着眼すへまこれと我邦むかしの美風にして治國の要も實にこゝにあり國司たる人のその國に下る先づ國內の神社にまうでぬえさてまつり民安かれといのるなるその神を敬ひ下を惠むの厚きいかにぞや支那にては州の太守などに任せらるゝ先づその國の賢者碩學を問ひて車を枉けて治國の道を詢ふこれその賢を尊ひ學を重するなり後世はその實は失せぬれどもその名は残りこれ支那二千年來の美風なり下にある者もこれによりてその上を尊ひ上にある人もこれによりて下の情を通するなり戸ごとにつきて民情をしり人々につきて上意を諭さんとせばその日もたらぬことなり先づその賢者につきて民の情をさぐり碩學を尊ひて文のをしへを勸むるこれを綱擧りて目張るといふ我邦は神國にして只神をうやまひて國の平かならんことをいのり民草の安らかならんことを願ふこれにてその代も治まりその民もなつく人心もこれ

によりて厚く風俗もこれによりて定まるこれ神代よりの美風にて他の國に見ざる所なりかゝる美風も中古まではありしなり然るにその後世をふるまふにかやうのならばしもいつしか廢れにすたれて今となりては一府一縣の司となりたる人もその地にかかるまづ諸官衙の高等官あるは在廳の下司民間の新聞記者なりとを酒樓によびて盛宴を張りもて一は赴任の披露をし一は交際の媒介をするのみにて神社には一たひもまうづることなくその國にはいかなる神々のおはしますらん名をさへしらぬ人多かりかゝればその地に賢人碩學の隱るゝありども尋ねだにせざることはいふも更なり神社をも敬はず碩學をも尋ねず只辭を卑くして媚ふるものは新聞記者手をととりて交はるものは役所の俗吏かゝる有様なれば治道の聞るゝやうもなく教育の盛になる道理もなしその國の民心は日々にはなれ風俗は月にみたりゆく誰がこれを怪まんや返すゝも古書をよむべきなり治國安民の要は古書の中に掲焉たり古を温めて新を知るとの聖訓はこれをいふにあらすや

物語の教になる事ども

もろこまのひしりの教に敦厚は詩のをしへなりとあり我邦の物語はなへて詩のをしへとやいふへからん今この集につきてその一系をひきていはん

つくしからわて上りてある男もとの妻の許にすゑたるに心いとよくて打語らひてわたるに男はこゝかしこ人の國にのみありきければ二人のみなんぬたりける筑紫より來たる女いと忍びて男を語らいたりけるにかういひける

よはにいてゝ月に見えずは逢ふことをしらす顔にもいはまし物をこのもとの妻心いとよき人にて男にもかゝることなんあると言はざりければ男外の方より人かたらふなりと聞きて思ひた

りけれと心にもいれて猶さるものにてなん置きたりけるさてこの男女異人ゴトヒトに物いふときとてその人と我ど何れか思ふと問ひければ

花すゝき君か方にそなびくめる思はぬ山の風は吹けどもまた呼はふ男もありしに世の中心うしかゝること聞いれしなといひけるものなんこの男をやう／＼思ひつきやしにけむ返言カヘリゴトなどして本の妻の許に文をひき結ひておこせたるを見ればかく書きたり

身をうしとおもふ心に懲りねばや人をあはれとおもひをむらんどこりすまによみたりけるかくて心の隔てたることもなくあはれなれはいとあはれと思ふほどに男は心かはりにければありしこともあらではかの筑紫に親はらからなどありければ往なむといひければ男も心かはりにければ留めてなんやりけるもとの妻なん諸共にありならひにければかくてゆくことを悲しと思ひけり山崎にもろどもにゆきて舟にのせなとするほどに男も來たりこのうはなりこなみ一日一夜萬の事をいひかたらひて晨アトめて舟にのりぬ今は男本の妻は歸りなむとて車にのりぬこれもかれもいとかなまと思ひけるに舟にのり給ひぬる人のとて文をなんもて來たるたゝかくばかり

二人こし道ども見えぬ涙のうへをおもひかけてもかへるめる哉とありければ男も女もいといたう泣きにけり漕フナさいで往ぬれば元返しもせずなりにけり

この物語大和物語にも見えてそのひかゝるものもありしなるへしどもかくにもこの物語をよみてひかしの人の情の深かゝりしをねもふへし後の人の心のつれなさを醫するにはこの物語にしくものをなき風教に關かるものといふはこれらをやいふらんこのつくまより男のつれ來たりし女は天の下の色好みにてとりけものにもおとりたる者なりかゝるものを男のつれて來て本の妻の許にたきける

よのつねの女ならましかは嫉妬のほのほもえたちてえたへすはてくは夫婦のあらかひとなりて一
家のあさはいもたこりぬへきは目に見えたることなるをつゆもその色にあらはさすつきのめづるも
のなれはとて同じくあはれをかけさらけに外の男に物かたらひけるにもそれとつげもせず之をよしと
つげんも夫は中々にあしさまにどらんもはかられざるぞかしさてその女のうつりかはる度かさなり
て男も心かはりてあきを生しいぬといへば幸にもおもふへきを京の町より山崎の川へまで婦うとづ
れにてわくりゆきそのうたをみてかたみにあはれとおもひてなきかなしむ常のあだなるにはこの女
めがとおもふもさて別れ行とれもへはあはれにその物をかなしがるも人の情にこそあれかゝる情の
ふるさ後の世にあるへくもあらずたいそのなさけのふかきのみかはその人いかなるしなの高き人な
りけむとおもひやるにもえたへすなんありけるかうやうの人の後のみんものは中々につたなしなど
いふめれどもこのなさけのあはれはこそこの世はつながらなれかの忠臣孝子と尊ふへき人たちも皆
この情のかたまりなりこの涙の多き人なるをかまこれをつむるにこの國もこの家も皆涙の多き人
にてつなきもてるものと心うへしかの涙なきものは皆家をさり國を出でゝあどをもかへりみだにせ
ぬものなり今の世を見るに天の下多くは涙のなきものなりこれにてこの國家萬民を維持せんとする
はしなくしてとらにのほらんよりもかたき教を掌とる人よく心すへきにや議論にてこの世のを
ささるものかはひまあらは物語をよむへし古歌を尋ぬへし

老はてゝの歌

さて上文にもあけたる老はてゝかしらの髪はしらのみつはくむまてなりけるかなの歌のみつはは
後撰集にはみつわどありてくさくさの説あり謡曲にはみつはこもみつわさもかひりおのれおもふにみつはは老女の髪のゆ

ひやうといふ説従ふへきに似たり源氏の夕貞の巻にも惟光か父の朝臣の乳母に侍りし者のみつはくみてす美侍るなり云々とありみつはくみつわおのく義のあるなりははわのあやまりともわははのあやまりともいひかたからんみつわは三輪なりみつはは三葉なりこの歌のみつはは老女の髪之三葉にわけてゆへるをいへるなるへし黒髪をしら川にたくかはせたれば黒かみも今は變して白がとなりしといふをしら川にいひかけたるなり詞書に水を汲めることいへればみつはくむを水汲むことにいひよせたるやうなれどもこれには意はなきなり老たるを歎きたるか本意なりその意は全首をつらぬきてけりよくく詞をおもふへしもしこれを水汲の意にみなは水汲むまで老はてたるとはいかでかいはん理りなきことならずや後拾遺集雜五に冷泉院東宮と申しける時女の石井に水汲みたるかた繪にゐきたるをよめと仰言侍りければ源重之「年をへてすめる清水に影みればみつはくむまで老とまにける」とありこれもこの歌をとりたるなればその意は一なり

(完)

後 涸 軒 茶 話

(其三)

劍道師範

中 嶋 後 涸 軒

予は今劍道談に入らんとするに先ち、尚、春風館及在學中の二三と、九州漫遊の事をのべん。

余の山岡道場春風館に出入するや、年甚だ長からずと雖も、學頭其他同輩の親信を受け、熱心と勉強との結果、著しく斯道の發達を覺へたるが、殊に余が終世忘るべからざるの快事は實に試劍のことのみにあらずして實に我鐵舟翁に親炙せしこと是なり。嗚呼、翁は古今絶代の偉人にして其風度遠邁、嚴乎たることは如神、温乎たることは如佛、予の海内を漫遊きて偉人傑士に遭遇すること